

ソーシャル・キャピタルと学習

——成人の学習に注目して——

杉 本 智

はじめに

本稿の目的は、主として地域づくりに関わるコミュニティ集団の学習活動（社会教育活動）とソーシャル・キャピタル（「社会関係資本」とも表記される）との関係の解明であり、とりわけ成人の学習活動がどのようにしてソーシャル・キャピタルを醸成しうるのかというプロセスを明らかにすることと、成人学習のどのような点がソーシャル・キャピタルを醸成しうるのかを明らかにすることとである。

学習とソーシャル・キャピタルとのかかわりについては、いくつかの先行研究においてその関係が明らかにされている。しかし、ソーシャル・キャピタルそのものの定義については、「社会学、人類学、経済学など社会科学のさまざまな領域に広範に広まった結果、ソーシャル・キャピタルの定義として、単一かつ普遍的に受け入れられるものは存在しない」（Kawachi et al ed. 2013＝2013：4）とも言われていて、厳然たる不動の定義といえるものがない。そこで、本稿では、まず第1節で先行研究において論じられた様々なソーシャル・キャピタルの定義を検討し、それら先行研究の定義の問題点を明らかにし、本稿におけるソーシャル・キャピタルの定義を行う。次に第2節でそれらの先行研究で論じられたソーシャル・キャピタルと学習のかかわりについての議論を検討する。そして最後に第3節でソーシャル・キャピタルと成人の学習とのかかわりについて、筆者が2014年に調査した、東日本震災がきっかけで取り組まれた三つの社会教育活動を通じて、フィールドにおける具体的な活動事例から理論的検討を行い、その関係を明らかにする。

第1節 ソーシャル・キャピタルの定義

近代社会においてソーシャル・キャピタルという概念を世界に広めたアメリカの政治学者ロバート・D・パットナム（Putnam）は、『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』

(1993=2001)において、ソーシャル・キャピタルとは、「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴をいう」と定義している。

また、パットナムは、『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』(2000=2006)において、「社会関係資本の形式の多様性のあらゆる次元の中で、最も重要なものはおそらく、『橋渡し型』(あるいは包含型)と、『結束型』(あるいは排他型)の区別であろう」(Putnam 2000=2006:19)として、ソーシャル・キャピタルを二つの類型に区分した。そして、結束型を、^{ボンディング}「内向きの志向を持ち、排他的なアイデンティティと等質な集団を強化」するタイプとし、その例として、民族ごとの友愛組織や、教会を基盤にした女性読書会、洒落たカントリークラブなどをあげた。また、橋渡し型を、^{ブリッジング}「外向きで、様々な社会的亀裂をまたいで人々を包含」するタイプとし、その例として、公民権運動、青年組織、世界教会主義の宗教組織などをあげている。さらに、結束型の社会関係資本は、特定の互酬性を安定させ、連帯を動かしてゆくのに都合が良く、橋渡し型の社会関係資本は、より広いアイデンティティや、互酬性を生み出すことができるとし、「結束型社会関係資本が、社会学的な強力接着剤なら、橋渡し型社会関係資本は社会学的な潤滑剤である」と説明している(Putnam 2000=2006:19-20)。

そして、「橋渡し型と結束型の両方の社会関係資本が、強力な正の社会的効果を持ちうる」が、「多くの集団は、何らかの社会的次元で結束し、そして同時に他と橋渡しを行っている」という複雑な関係にあることから、「結束と橋渡しは、それにより『どちらか一方』に社会的ネットワークがきれいに分けられるといったカテゴリーではなく、社会関係資本のさまざまな形態を比較するときに使える、『よりその傾向が大きい、小さい』という次元のこと」であるとしている(Putnam 2000=2006:21)。

一方彼は、ソーシャル・キャピタルのダークサイドにも触れ、「社会関係資本の外部効果は常にプラスというわけでは全くない」として、オクラホマ・シティーでのビルの爆破事件などの凶悪集団による犯罪や、都会のギャングなどの反社会的集団においても、ソーシャル・キャピタルが機能していることを指摘している。さらに、結束型ソーシャル・キャピタルが、自由や寛容性などに対し制約をもたらし、同性愛者や異文化の受け入れに縛りを与えることなども指摘している。

これらのパットナムのソーシャル・キャピタルに対する基本的な見解は、その後の多くの研究者達に強い影響を与え、このパットナムの基本的な見解から新しい見解へと発展していったものであるといえる。

ジョン・フィールド(Field)は、『ソーシャルキャピタルと生涯学習』(2005=2011)において、ソーシャル・キャピタルとは、「社会的ネットワークから生じる互酬性」、「相互の目標を

達成するための価値」からなるものと定義し、それは、他者からの協力が保障されることによって、自分の目標を達成しようとする人々の能力を高めることを可能とするような潜在的な資源として役立つとしている。

また、ソーシャル・キャピタルの理論に関する議論はほぼすべて、ピエール・ブルデュー、ジェームズ・コールマン、ロバート・パットナムらの貢献から始まっているとして、草分け的理論家としてこの三人を高く評価しながらも、この三人にはジェンダー的視点が欠如しているとして批判し、さらに、パットナムについては、フォーマルなコミュニティ関与、インフォーマルな社会的つながりの男女差に触れるなど、^①ソーシャル・キャピタルのジェンダー性にわずかに注目しているものの、満足できるものではないとしている。そして、コールマンとブルデューについては、「この問題をほとんど無視している」(Field 2005=2011: 38)と厳しく指摘し、多くの市民参加がジェンダーの違いを強く反映していることや、成人生活での学習にジェンダーが関連していることの重要性を考慮に入れると、「この研究ではジェンダーの関連のことを無視することはできない」(Field 2005=2011: 38)として、ソーシャル・キャピタル研究におけるジェンダー的視点の重要性を強調している。

さらに、フィールドは、彼ら三人が、「ソーシャル・キャピタルは、絶対に良きものであり、それが多いに越したことはない」(Field 2005=2011: 38)と考える傾向があるとして批判し、ソーシャル・キャピタルの暗い側面（それがもたらす負の影響）を考慮せずに、単にコミュニティの善を形成するものと捉えるべきではないとしている。

また、フィールドは、ソーシャル・キャピタルの分類手法について、マイケル・ウルコック(Woolcock)の「社会的つながりの三つの大きなカテゴリー」を引用して、「1. 直系家族、親友、隣人のような、よく似た状況にいる似た者同士の間からなる結束型(bonding)ソーシャル・キャピタル、2. さほど親しくない友人、職場の同僚といった、似た者との距離がより大きい絆からなる橋渡し型(bridging)ソーシャル・キャピタル、3. コミュニティの完全に外にいる人々のような、異なる状況にある、似ていない人々に手を差し伸べる、関係型(linking)ないしは、はしご型(scaling)ソーシャル・キャピタルで、コミュニティの成員がコミュニティ内部で利用可能な資源よりもずっと広範囲の資源を活用することを可能にする」として、パットナムの類型の「結束型」「橋渡し型」に、「関係型、ないしははしご型」という新しい類型を加えて、さらに広い範囲のコミュニティにソーシャル・キャピタルが存在することを示唆している。(Field 2005=2011: 39)

つまり、フィールドの、基本的な考え方は、ソーシャル・キャピタルを他者との協力で、自分の目標を達成しようとする人々の能力を高める潜在的な資源、すなわち個人の目標を達成するための資源という見解に重点を置くという考え方であり、主にコミュニティ集団のソーシャ

ル・キャピタルと学習活動との関係を考察の対象とする本稿の分析枠組みとしては適当でない。

リチャード・フロリダ (Richard Florida) は、『クリエイティブ資本論——新たな経済階級の台頭』(2002=2008) において、アメリカのコミュニティの多くの面が20世紀後半に急激に衰退した原因を、パットナムが、ソーシャル・キャピタルの衰退に由来しているとした (Putnam 2000=2006) ことを批判した。また、フロリダ自身が行った調査から、パットナムの言う「結びつきの強いコミュニティ」を欲している人はほとんどなく、「自分の生活や自分自身でいることが妨げられない程度」(Florida 2002=2008: 337) の弱い絆のコミュニティが求められているとして、パットナムの主張を厳しく批判している。

このフロリダの見解には、支持できるものがあるが、パットナムは、必ずしも結びつきの強いコミュニティだけを必要としたのではなく、結束型、橋渡し型の双方が同じコミュニティに同時に存在し、双方の働きによって正の効果が表れるとしているのであって、フロリダのパットナム解釈は一面的であるといえる。

さらに、フロリダは、「固い絆と高いレベルの伝統的な社会資本^②が内部者に利益を供給し、安定を促進する一方、ゆるいネットワークで絆も弱い場所では新参者を歓迎し、そのための資源やアイデアの今までにない組み合わせを促進する」(Florida 2002=2008: 342) とし、今後、このゆるいネットワークのタイプのコミュニティが、技術イノベーションや経済成長で有利になることを示唆し、クリエイティブ階級という新たな階級の台頭がアメリカ社会のコミュニティのあり方を変え、多民族・多文化に寛容で多様性に富む地域が今後大きく発展し、政治経済の中心となるとしている。しかし、本稿の目的が、地域の政治経済の発展についてではなく、地域づくりに関わるコミュニティ集団の学習活動とソーシャル・キャピタルの関係を検討することであることから、このフロリダの議論は本稿の分析枠組みとしては適当でない。

イチロー・カワチ (Kawachi)、高尾総司、S・V・スブラマニアン (S. V. Subramanian) ら (以下「カワチら」とする) は、『ソーシャル・キャピタルと健康政策』(2013=2013) において、「ソーシャル・キャピタルという概念を用いることの重要性は、われわれの関心対象を、個人ではなく、個人が埋め込まれた社会構造へと向けさせる点にあると考える」とした。すなわち、「なぜあるコミュニティは他のコミュニティと比べて災害からの復興が速やかで、犯罪を抑止し、労働者の健康を増進するのか」という個人が埋め込まれた社会を問うという問題と、「なぜある個人は他の人よりもずっと健康状態が良いのか」(Kawachi et al ed. 2013=2013: 5) という個人個人のケースを問うという問題とは全く性質の異なるものであるとして、ソーシャル・キャピタルという用語は、コールマンの主張するように、そこに属する個人の行動を促進する社会構造の特徴を指して用いるものとするとしている。そして「構造内の個人の行動を促進する社会構造」の特徴の例として、「拘束力のある信頼」、「情報チャンネル」、「流用可能な社会

組織」の三点を挙げた。「拘束力のある信頼」とは、たとえば、職場での助け合いで援助を受けたことがある者が他を援助しなければ制裁を受けること。「情報チャンネル」とは、より多くの独立したネットワークにより、災害時に水や食料の情報を迅速に入手する可能性が高まること。「流用可能な社会組織」とは、もともとは溝掃除などのコミュニティの維持管理のための組織であっても、災害対応にも役立つことと説明している。つまり、このカワチらの考え方は、仲間をしっかりと結び合わせる確かな結束力と他を受け入れる寛容性を兼ね備えたコミュニティをソーシャル・キャピタルの豊かなコミュニティとするというものであり支持できるものが多いが、ネットワークを「情報チャンネル」として情報源に限定していることに難がある。

松田武雄は、『社会教育・生涯学習の再編とソーシャル・キャピタル』（2012）において、ソーシャル・キャピタルの概念について、パットナムが、ソーシャル・キャピタルの下位構成要素を、当初、一般的信頼、一般化された^③互酬性の規範、水平性と多様性のある市民社会のネットワークの3つとしていたにもかかわらず、『孤独なボウリング』以後拡張して用いていること、「それはたとえば『水平性と多様性のある市民社会のネットワーク』を単に『ネットワーク』として修飾語なしに用いる、という点に現れており、このことによって議論の混乱を招いている」とした坂本治也の批判に触れ、ソーシャル・キャピタル概念は、「人々の間の自発的協調関係をより促し、『集合行為のジレンマ』のソフトな解決に役立つ『市民社会の水平的ネットワーク、一般的信頼、一般化された互酬性の規範』」とした坂本の定義に同意できるとしている。つまり、この定義は、パットナムの定義とほぼ共通のものであるが、わかりやすい定義と言える。

三隅一人は、『社会関係資本——理論統合の挑戦』（2013）において、「すなわち社会関係資本は、人々の関係やそのネットワーク、規範、信頼などからなる社会構造が、資本のような働きをする側面を持つ、まさにその側面にスポットライトを当てる比喩的概念である」としている。しかし、「比喩的」とする一方で、労働力のなかに資本的要素を比喩的に定めた人的資本の概念と同様に、資本としての一定の実在性を持っていることも認めている。さらに三隅は、社会関係資本に関する同書の定義として、「社会関係資本とは、行為者に収益を生み出すようなすべての社会構造資源である」としている。

ソーシャル・キャピタルが、現実に関個人や組織の利益などに影響を与えることは、いくつかの先行研究で論じられているところであり、三隅のこの定義は理解しやすいが、ソーシャル・キャピタルと学習のかかわりを分析することを目標とした本稿の分析枠にはなじまない定義である。

稲葉陽二は、『ソーシャル・キャピタル入門——孤立から絆へ』（2011）において、ソーシャル・キャピタルについて「わかりやすく言えば、人々が他人に対して抱く『信頼』、『情けは人

の為ならず』、『お互い様』、『持ちつ持たれつ』といった言葉に象徴される『互酬性の規範』、人や組織の間のネットワーク（絆）^③ということになる」とし、さらに、パットナムの定義である「信頼・規範・ネットワーク」に、「心の外部性」^④を加えて、「心の外部性を伴った信頼・規範・ネットワーク」（稲葉 2011：27）と定義している。そして、ソーシャル・キャピタルには、異質な者同士を結びつけるブリッジング（橋渡し型）なものと、同質なもの同士が結びつくボンディング（結束型）なものとがあり、被災者救済のために様々なタイプの人が集まるNPOなどのネットワークはブリッジングなソーシャル・キャピタルであり、大学の同窓会、商店会や消防団等の地縁的な組織などはボンディングなソーシャル・キャピタルであるとして、ソーシャル・キャピタルの類型についてはパットナムと共通した理解を示している。

今村晴彦、園田紫乃、金子郁容（以下「今村ら」とする）は、『コミュニティのちから——“遠慮がちな” ソーシャル・キャピタルの発見』（2010）において、ソーシャル・キャピタルには、「パットナム（Putnam）が言う北イタリアタイプの、『強い自発性によるソーシャル・キャピタル』」と、「日本の地方の様々なコミュニティを支えている『お互いさま』や『お世話になったから』」といというような気持ちが働いていると思われる『“遠慮がちな” ソーシャル・キャピタル』がある」としている。

また、今村らは、長野県における保健補導員^⑤による長寿で医療費の少ない「理想郷」づくりの活動や、東京都奥多摩町における遠隔医療実験によるコミュニティづくりを通じた健康増進活動の事例を示し、その実践の中で地域に存在する“遠慮がちな” ソーシャル・キャピタルが、住民の中に良好なコミュニティをつくりだし、健康状態を改善することを示唆している。

今村らが主張する、“遠慮がちな” ソーシャル・キャピタルとは、「強い自発性の発露というより、むしろ、ほかの人たちから影響を受け、他人を配慮する、やや控えめな、様々な小さな活動の連なり」から発生する「いいコミュニティ」で、日本の地方の様々なコミュニティを支えている、「お互いさま」や「お世話になったから」といというような気持ちが働いているというソーシャル・キャピタルのことであると説明している。つまり、これは、ゆるやかな強制とでもいえるような力が動機となって、人がソーシャル・キャピタル醸成の力となる活動に取り組むことを表しているとして理解でき、非常に興味深い議論であるが、その遠慮がちなソーシャル・キャピタルがどのように形成されるのかや、学習活動との関係が明らかにされていないという弱点がある。

筆者は、以上の議論を踏まえて本稿におけるソーシャル・キャピタルの定義を次のように考えることとする。まず第1番目には、これまでのソーシャル・キャピタルの議論のほとんどが、パットナムの議論から間接あるいは直接的に影響を受けたものであると言えることである。繰り返しになるが、パットナムは、ソーシャル・キャピタルとは、「社会の効率性を改善できる、

信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴をいう」とし、「結束型社会関係資本（ボンディング型）は、社会的な強力接着剤、内集団への強い忠誠心を醸成するが、一方では外集団への敵意（負の外部効果）をもたらす」、「橋渡し型社会関係資本（ブリッジ型）は、社会的な潤滑剤となる」とし、さらに「橋渡し型と結束型の両方の社会関係資本が、強力な正の社会的効果を持ちうる」とした。つまり、ソーシャル・キャピタルには、結束性の強いものと橋渡し性の強いものが存在し、その二つが同一のコミュニティに同時に存在することで、集団内外の潤滑性が向上し、仲間と力を合わせて何かを成し遂げるための結束力が生まれ、集団のジレンマの解決にも役立つということである。この理論的枠組みに依拠すれば、多様な集団のあり方を内部の視点および外部の視点からも、さしあたりは明確に整理することが可能である。

また、上記の議論に限らずともパットナムのソーシャル・キャピタル論は、世界中で最も影響力があり、明確な定義の存在等から、多くの研究者がパットナムのソーシャル・キャピタル理論に依拠して議論を行っていることから、これに依拠することは妥当と考えることができる。しかし、パットナムやフィールドが言うように、ソーシャル・キャピタルの全てが「善」であるとは限らないという議論を踏まえて、ボンディング性の強いソーシャル・キャピタルの排他性・閉鎖性などによる負の社会的効果と、ブリッジ性の高いソーシャル・キャピタルの結束性の脆弱さなど、ソーシャル・キャピタルの類型やその性質に注目することが重要であると考える。

第2節 ソーシャル・キャピタルと学習のかかわり

パットナムの著書からは、ソーシャル・キャピタルと成人の学習のかかわりに関する直接の示唆は認められないが、教育（ここでは主に教育水準を意味している）との関連については、「教育水準が高いほど、自らの有効性を信じるいわゆる有効性感覚も強くなる」「教育は、イタリアも含めてほとんどの国において、政治行動に対するもっとも有力な影響力の一つである」（Putnam 1993=2001：142）とその影響力を暗示しながらも、「イタリアの州を語る場合、今日の教育水準は州政府のパフォーマンスの違いを説明しない（中略）歴史的に見れば、教育は市民共同体の基礎固めに対してある種重要な働きを果たしてきたが、今日では教育は政府パフォーマンスにいかなる直接的な影響力も有していないように思われる」（Putnam 1993=2001：142）として、ソーシャル・キャピタルと関連の深い、市民共同体の基礎固めや、政府パフォーマンスに対する今日のイタリアにおける教育の影響力を否定している。しかし、「だが、非識字率の地域差は、北部0.9%、南部4.6%と依然認められる」、「読み書き能力は、国家統一の時点では南よりも北で高く、このギャップは1871年から1911年までにいっそう開いた。教育は、北部のいっそう急速な進歩を説明する上で役立つ重要な隠れた強みであった」（Putnam

1993=2001:269)とし、識字率や、読み書き能力の北部と南部の地域差が北部と南部の進歩の地域差に影響していることを示唆している。このことは、ソーシャル・キャピタルが豊かであった北部地域において、「日常経験などに基づく組織的でないインフォーマルな成人の学習活動」、や、「正規の学校の枠外で、目的を持って組織的に行われたノンフォーマルな成人の学習活動」がソーシャル・キャピタルによって醸成され、その学習の成果が現われていることを暗示しているのではないだろうか。

パットナムは、「市民参加についての組織や、それよりフォーマル性の低いネットワークは、そのメンバーに対して、公共生活に参加するのに必要な実践的スキルと共に、協力習慣や公的精神を染み込ませていく」、「自発的結社と教会が市民的スキル構築のための最良の機会を提供しており、専門職の者にとってもそれらのグループは市民的学習の場として職場に次ぐ二番目のものであった」として、市民参加を本来的に教育的なプロセスとし、結社を互酬性と信頼のための能力を高める民主主義の学校と位置付けていた(Putnam 2000=2006:416-7)ことから、そうした成人の学習活動を想定しているといえる。

ジョン・フィールドは、ソーシャル・キャピタルの学習への影響について、自身が行った北アイルランドでの調査の結果と、クレア・ストローンがポートランドとオレゴンで行った縦断的調査(Strawn 2003)の結果を比較して、「ポートランドと北アイルランドの文脈の違いを前提にすると、ほんとうに驚くべきことは、その調査結果がいくつかの鍵となる問題において一致していることである。それは、インフォーマルな学習についてのネットワークの重要性と、フォーマルな学習への希望や関心についてのネットワークの影響が小さいことを含んでいる」(Field 2005=2011:133)として、インフォーマルな学習にはソーシャル・キャピタルの影響が強く、フォーマルな学習にはソーシャル・キャピタルの影響が小さいことを示唆している。

さらに、学習がソーシャル・キャピタルに与える影響については、「学習は人々に他者とのかわりを促進する能力を与えることができるという証拠がある」、「学習はまた、参加したり、参加から積極的な成果を得る可能性を高めたりするために必要とされる能力を強化する」(Field 2005=2011:135-6)として、学習がソーシャル・キャピタルに強い影響を与えることを示唆している。

また、ロンドン大学の学習利益研究センター^⑥による分析に基づき、職業科目とアカデミックな科目をめぐる人々の経験が対照的なことを述べ、アカデミックな科目への学習参加の結果がソーシャル・キャピタルの醸成に強い影響を与えること。そして、職業科目の学習参加の結果は、ほとんどソーシャル・キャピタルの醸成に結び付かないことを明らかにし、次のように述べている。「科目を学び始めたときに、相対的に孤立し自信を欠いている人々や、資格に結びつかない科目を学ぶ人々」は、積極性や寛容性が増し、ソーシャル・キャピタルの醸成に結び

付く大きな変化が顕著にみられるとしている。しかし、「33歳から42歳の間で職業科目に参加をしても、ほとんどソーシャル・キャピタルのメリットはない」として、成人の職業科目の学習がソーシャル・キャピタルの醸成につながりにくいことを指摘している。

松田武雄は、『社会教育・生涯学習の再編とソーシャル・キャピタル』（2012）において、シーグ・スコッチポル（T. Skocpol）が提起した、ローカルな団体と政府の民主的なガバナンスをつなぐという視点に学び、分権制度への住民参画の実践によって、社会教育は、どのように自治体や国家レベルでの公共善を実現できるのかを住民自身が問い続ける持続的な学習と討議の場をつくり、コミュニティ・ガバナンスを担い実質化する住民の自治的な力量形成に関わり続け、このような住民の主体形成がコミュニティにおけるソーシャル・キャピタルの構築に連関していくとして、社会教育とソーシャル・キャピタルの強い関係性を示唆している。

佐藤智子は、「社会関係資本に対する成人学習機会の効果——教育は社会的ネットワークを促進するか」（2011）において、「『橋渡し型』だけでなく『結束型』の社会的ネットワークにも目を向けながら、両方の類型を含む社会関係資本が、成人期の学習機会とどのような関連性を持つのかを実証的に検討する」として、「生活と意識についての国際比較調査」（日本版 General Social Survey-2000, 2001）のデータから、家族のつながりの強さを示す指標として「家族そろっての夕食」の頻度を用い、友人とのつながりの多さを測る指標として「友人との会食や集まりの頻度」を用いるという方法で、成人期における学習機会が、個人の持つネットワークのタイプに影響を与えているか否かを検証した。その結果を佐藤は、家族と友人によって構成される「関係志向型」ネットワークの構築や維持に対しては、成人期の学習機会が有効な手段になり得ることが示されたとした。また、先行研究では、「社会関係資本の豊富さにおいて、学歴の高い人ほど有利な条件を持っている」ことが指摘されてきたことに対して佐藤は「学歴による直接的な効果は見られなかった」としてこれを否定し、「成人期に経験する教育・学習機会が、社会的ネットワーク形成の重要な要因である」という点を当該論文の結論の要旨としている。

さらに佐藤は、「教養講座の受講経験が正の効果を持つ一方で実務講座の受講経験はそうではなかった」こと。「趣味やスポーツのグループへの所属が効果を持つ一方で業界団体や市民運動グループには効果が見られなかった」ことを踏まえて、学習される内容やその方法が、ソーシャル・キャピタルの醸成に重要な影響を与えることを指摘している。

筆者は、第2節において、ソーシャル・キャピタルと学習のかかわりについて、いくつかの先行研究の議論を確認し、検証を行ってきた。その結果は次のようにまとめることができる。

①学習はソーシャル・キャピタルの醸成に強い影響を与える。②アカデミックな学習はソーシャル・キャピタルの醸成に強い影響を与えるが、職業科目の学習は、ほとんどソーシャル・キャ

ャピタルの醸成に結び付かない。③インフォーマルな学習にはソーシャル・キャピタルの影響が強く、フォーマルな学習にはソーシャル・キャピタルの影響が小さい。

第2節において明らかになったことは、ほぼ以上のとおりであるが、これはすなわち、学習の形態や内容によってソーシャル・キャピタルへの影響が異なることを意味し、学習とソーシャル・キャピタルの関係を考察する際には、学習の形態や内容に十分注目することが重要であることを意味していると考えなければならない。

続いて次の第3節においては、第2節で確認したこのようなソーシャル・キャピタルと学習の関係についての議論を踏まえ、筆者がフィールドにおいて調査した、社会教育活動における成人の学習活動が、どのようにしてソーシャル・キャピタルを醸成しうるのか、また、どのような点がソーシャル・キャピタルを醸成しうるのかを明らかにする

第3節 ソーシャル・キャピタルと成人の学習

東日本大震災被災地等における社会教育活動

今回、筆者は、宮城県の「株式会社小泉地区の明日を考える会」（以下「明日を考える会」と「NPO 法人亘理^{わたりの}いちごっこ」（以下「亘理いちごっこ」）、及び京都市の「特定非営利活動法人和ーなごみー」（以下「なごみ」）の合計三つの、東日本大震災がきっかけで取り組まれた社会教育活動について2014年に調査を行った^⑦。これらの調査をもとに、以下、成人の学習活動とソーシャル・キャピタルとのかかわりについての考察を行う。

「明日を考える会」の社会教育活動は、2011年3月11日の東日本大震災と大津波によって町が壊滅的な被害を受けた宮城県気仙沼市小泉地区の住民達によって、高台への集団移転を目標として取り組まれた、24回のワークショップと6回のフォーラムからなる自主的な学習活動^⑧で、この学習活動によって集団移転への合意形成と、住み良く美しい街づくりを実現したというものである。

「亘理いちごっこ」の社会教育活動は、震災と津波で被害を受けた宮城県亘理郡亘理町で、被災者に温かく栄養のある食事を無償で提供し、被災のために辛い日々を送っている人々に寄り添い、その思いを聞き取り、被災による精神的ダメージから再び立ち上がるまでの立ち直りを支援する社会教育活動である。

「なごみ」の社会教育活動は、主に東京電力福島第一原子力発電所爆発事故の被災地から京都府内へ避難・移住した人たち、及び避難・移住をしようとする人たちの、住居、就業などの支援、さらに、被災地と京都の言葉の違いや文化の違いに戸惑いや不安を感じている避難・移住者達の自立を支援する社会教育活動である。また、避難・移住者たちの就労の場として、お座敷タイプコミュニティ・カフェ「キッチン Nagomi」を設立し、就労と、自立への学習の場

を創出している。

三つの社会教育活動の特徴

これらの三つの社会教育活動に共通して見られる特徴は次のとおりである。

いずれも①東日本大震災の地震や大津波、及び東京電力福島第一原子力発電所爆発事故での被災によって生じた課題を解決する学習である。②住民主導型の社会教育活動で、社会教育行政職員や、公民館職員による関与が見られないことである。③学習者が成人で、学習形態が、M・ノールズ (M. Knowles) が提唱したアンドラゴジー型であり、学習の在り方に、問題中心型、経験基盤型、生活課題型といった特徴が見られる。端的には、①「課題解決型」、②「住民主導型」、③「学習者が成人で学習形態がアンドラゴジー型」と言えよう。以下三つの社会教育活動の内容について先に見た①、②及び③に対応して説明する。

「明日を考える会」の社会教育活動では、①津波で全壊した小泉の町を高台へ集団移転するという課題への取り組み。②会員達が専門家と有識者の協力を得ながら、自らの力で24回のワークショップと6回のフォーラムを開催し、住民の合意形成と、まちづくりの主体形成を行い、国の補助事業「防災集団移転促進事業」(以下「防集事業」)の認定を受け、自己負担の少ない集団移転に成功する。③ワークショップでは、ファシリテーターの問いかけに参加者(学習者)が自分の考え方を発表し、ファシリテーターは、一人ひとりの考え方を尊重し、参加者みんなの討議の中から最も良い方向を引き出すという学習形態がとられた。

「亘理いちごっこ」の社会教育活動では、①被災者の被災による家族等の喪失や住居の喪失などの生活の変化や、被災時の恐怖による精神的ダメージを学習課題としている。②スタッフ(学習支援者)が被災者に温かく栄養のある食事や、支援物資の提供などを行うほか、他に聞き手のいない被災による苦しみなどの話の聞き取りを行う。③それによって被災者がライフイベントによるダメージを乗り越え、新たな生きがいを見出すという移行過程(学習過程)を内包している。これは、メジローが提唱する「意識変容の学習」^⑨モデルの学習で、スタッフ(学習支援者)が寄り添うことで被災者(学習者)の意識変容を支援するという、経験を学習基盤としたアンドラゴジー型の学習である。

「なごみ」の社会教育活動は、①京都府内へ避難・移住した被災者達が、住まいを確保することや就業することなどの生活に密着した課題を学習課題とする。②スタッフによる指導や助言を受けながら住まいや、就労に必要な学習に取り組み、必要に応じて専門家を招いて学習会を開催するという方法で学習する。③資力や生活条件に合った住宅を選んだり、就労の条件や職場の現状などを学ぶほか、言葉や文化の違いを克服する学習にも取り組むなど、経験を基盤としたアンドラゴジー型の学習をしている。また、ここにおいても、避難・移住というライフ

イベントを克服する意識変容学習が内包されていると考えられる。

以上に見たように、これら三つの社会教育活動の事例からは、「課題解決型」、「住民主導型」、「学習者が成人で学習形態がアンドラゴジー型」という三つの共通する特徴が見いだされる。

ソーシャル・キャピタルの醸成

「明日を考える会」が実施したワークショップとフォーラムの記録からは、小泉地区の住民が、従来から地域住民同士の繋がりも豊かで、異なる考え方に対しても寛容性を持っていたことがわかる。参加者の感想に見られる、「上下関係を意識せず、互いに言いたいことが自由に言い合える人間関係がある」という言葉からは水平的ネットワークが、「これまで一緒に暮らしてきた人々とこれからも一緒に暮らしていきたいというみんなへの信頼感」という言葉からは、一般的信頼が、そして「これまで小泉のみんなにお世話になってきた。これからは自分が小泉のために役立ちたい」という言葉からは、一般化された互酬性の規範が認められ、パットナムの言うソーシャル・キャピタルの三つの要素を認めることができ、ソーシャル・キャピタルの存在を確認することができる。

この24回のワークショップと6回のフォーラムの学びによって、小泉地区の住民たちは、小泉の優れた特性を共有し、それを引き継ぐまちづくりの方法を共有する、まちづくりの主体へと成長した。そして小泉のコミュニティは、小泉のソーシャル・キャピタルを、結束性と橋渡し性を併せ持った、さらに充実したものに成長させたのである。それは、「世界のどこにもないコミュニティ重視設計の街並み」、「すべてをオープンな話し合いによって決定する宅地配分」、「美しい街並みを維持するための『建築協定』の設定」などの実績や、ルールを作り出したことからそれを確認することができる。

また、会の核となった40歳代・50歳代の仲間たちは、会結成の準備段階で、若い人に声をかけて仲間に取り込み、「長老達」に顔の利く人を会長に選ぶなどして、高齢層にも若者層にも広範なつながりのネットワークを構築し、ワークショップやフォーラムに幅広い年層の住民たちを組織したが、このことがソーシャル・キャピタルを醸成する力になったといえる。さらに彼らは、住民主導方式で防集事業に取り組むためには、行政主導方式と比較して、より多くの知識とより強力な指導力が必要であることを取組の当初の過程で理解した。つまりそれは、集団移転や宅地造成の専門知識のほか、指導力、調整力、組織力などの専門的能力であった。このため、彼らは、外部の有識者^⑩と専門家を探索し、会員の仕事関係などのリンクをいくつか経て、^⑪㈱アトリエバンクの和田敦の協力を得、さらに、和田の紹介で北海道大学大学院工学研究院の森傑^⑫の協力も得た。この関係構築過程については、「明日を考える会」と和田及び森が、

いくつかのリンクを経て、「異なる背景を持つ異質な人を結ぶ紐帯」（立田ほか 2011：210）によって繋がり、有益な情報を提供するなどの協力関係を生み出していることから、橋渡し型ソーシャル・キャピタルの醸成過程と認められる。

次に、「亘理いちごっこ」におけるソーシャル・キャピタルの醸成についての考察を行う。利用者にとって「亘理いちごっこ」のスタッフは、食事を提供してくれる人であり、話を聞いてくれる人である。スタッフは、一方的な善意の提供者ではなく、同じ地域で共に生きる者として、利用者の心に寄り添い、話を聞き、共感する仲間としての活動を続けている。この社会教育活動からは、相互の信頼関係と緩やかなネットワークが形成され、相互の立場を尊重するという規範が醸成される。したがってここには、橋渡し型ソーシャル・キャピタルが醸成されるという側面もある。

「亘理いちごっこ」のスタッフ仲間は、被災者を支援する同一の目的で共に活動する強い結束力を持った仲間である。彼女らは、被災者支援の活動について日々実践的に学ぶという社会教育活動に取り組んでおり、そこにおいては、ゆるぎない信頼関係、日常的に活用されるネットワーク、そして規範を守ることで組織運営を合理的に行っている。したがって、この側面には、結束型ソーシャル・キャピタルが醸成されている。

また、「亘理いちごっこ手芸サークル」は、「亘理いちごっこ」の「コミュニティ・カフェ・レストラン」で提供される食事の利用者や、「お話聞き隊」による聞き取りの利用者などで構成されている。その中には「お話聞き隊」の隊員として活動している人も含まれている。メンバーは一人暮らしの年輩の女性などで、地震や津波の耐え難い恐怖や、家や財産を失う、家族、親類、友人を失うなどの経験を共有し、同じ辛さを持っている。彼女らは、手芸作品作りをする傍ら、自分の思いを仲間聞いてもらい、仲間の話を聞いて共感するという活動を続けることで強い連帯感を持つようになった。こうした状況から「近似的状況にいる同質の人々の間に現れる」（立田ほか 2011：210）ソーシャル・キャピタルである、結束型ソーシャル・キャピタルが醸成されている面が強いといえる。

なお、「亘理いちごっこ」は、今後も「わたり Home Coming Day」などのイベント活動を通じて被災者間の交流を深めていくほか、他地域との連携協力もさらに発展させて行く方針であるという。利用者間の緩やかな結束性が今後徐々に強い結束に変化してゆくことが期待される。そしてそこに、「東日本大震災の被災による辛い経験をした仲間」としてしっかりと繋がり合う結束性」と、「孤独な被災者に手を差し伸べ、経験のない人には経験から学んだことを伝えてゆく」という幅広い繋がり、橋渡し性を併せ持つ、豊かなソーシャル・キャピタルが醸成されることが期待される。それは、被災者が持つそれぞれの被災経験を交流し、相互に学ぶことによって、自然災害の被害を最小限に留める知恵や、被災した時に再び立ち上が

るための知恵が確かなものとして蓄積し、広く発信してゆくという行動につながると考えられる。

次に、「なごみ」の社会教育活動におけるソーシャル・キャピタルの醸成について検証する。「復興サロン和」の相談事業は、2011年10月の開設から4年目を迎えたが、当初子育て世帯の避難・移住者の支援を中心に「復興サロン」を開き、住居や支援情報を提供し仲間づくりを進めていたころには、福島県や茨城県などの東北地方・関東地方の遠方から京都府内へ避難・移住してきた「なごみ」の利用者たちは、どのような支援が受けられるか、それを受けるためにはどのような手続きが必要かなどについて学び、共に学ぶ利用者の間に、辛さや不安を共有する者同士としての仲間意識が生まれ、携帯番号などを交換し、連絡を取り合うようになった。そこには、困ったことや、不安なことをお互いに聞き合うという形でのネットワークが発生し、相互信頼、約束を守る（規範）コミュニティが形成された。こうして、緩やかな繋がりを持つ橋渡し型のソーシャル・キャピタルが醸成されて行った。震災後5年目を迎える現在は、避難・移住者の住む地域ごとにコミュニティが形成され、そこで日常的に情報交換や交流活動が営まれている。こうした学習性の高い活動が、その地域にネットワーク、相互信頼、コミュニティのルールを守るという規範も形成しつつ、結束型と橋渡し型の特性を併せ持つソーシャル・キャピタルを醸成していった。これらの地域コミュニティにおいては、コンタクトのとれない避難・移住者が地域にいと、その対策を「なごみ」に相談するという事例があるということであるが、こうした仲間を気遣う行為もこのソーシャル・キャピタルの効果である。

「なごみ」で取り組まれている各種の催し事業は、そこに集まる同じ学習要求を持つ人同士と一緒に学び交流し、相互理解と仲間意識を育てている。ここにおいては同じ学習要求を持つという仲間意識から生まれる相互信頼、仲間として繋がっていきたいという気持ちから生まれるネットワーク、仲間とお互い気持ちよく学び過ごすための規範遵守の気風が形成され、緩やかな結束性の橋渡し型のソーシャル・キャピタルが醸成されている。

「キッチン Nagomi」は、京都への避難・移住者、ことに子育て世代の女性が働きやすい職場づくりの事業として取り組まれたもので、京都市下京区の一軒の町家を改造し、安全な食材を使った昼食、夕食が楽しめるコミュニティ・カフェ・レストランとして設立された。「言葉や文化の違いの壁があって職場になじめない」「今まで働いたことがなく自信がない」「子育て中で働ける時間が限られる」という悩みを持った人たちがここで仲間と共に働き、働くことを学び、励まし合いながら調理師免許にも挑戦している。そして、仲間とのネットワーク、相互信頼、職場の規範を守る気風が育っている。つまり、ここにおいては、仲間への連帯感と寛容性、すなわち結束型、橋渡し型の特性を併せ持つソーシャル・キャピタルが醸成されている。

また、「キッチン Nagomi」は、「京都の町づくりを担うコミュニティ・カフェ」としての役

割も持ち、親子で楽しめる「こどもうたごえカフェ」や、ほかの人には言えない「ぼやき」や「なやみ」を、お坊さんがお酒を共に飲みながら聞いてくれる「カフェ・デ・モンク」などの地域の人たちとともに取り組む様々なイベントに取り組んでいる。その一方で、被災者支援や被災地の状況の正しい理解、ことに福島原発事故による放射能被害の実態、正しい情報を地域住民に提供する学びの場でもあり、地域住民が被災者支援や正しい情報を発信する活動に参加・協力し、ネットワークに参加できる場でもある。したがって、ここにおいては、緩やかな結束性を持つ橋渡し型ソーシャル・キャピタルが醸成されている。

まとめ

以上のとおり、本稿では、筆者が調査した三つの社会教育活動において、成人がいかにしてそれぞれの形態の中で課題解決型の学習に取り組み、それぞれに結束型・橋渡し型の強弱についての個性差を持つ、ソーシャル・キャピタルが醸成されてきたのかを明らかにした。そして、それらの成人の学習活動が、地域コミュニティづくりとの関わりで、どのようにしてソーシャル・キャピタルを醸成しうるのかというプロセスを明らかにすることと、成人学習のどのような点がソーシャル・キャピタルを醸成しうるのかを明らかにすることができた。

註

- ① パットナムは、ソーシャル・キャピタルとジェンダーの関係について、フォーマルなコミュニティ関与、インフォーマルな社会的つながり、家族や友人にかけける長距離電話、挨拶状や贈り物、私信の頻度が女性の方が高いが、女性の有給労働（フルタイム労働）への参入がその性差をばやけさせていることを述べ、「社会的な接触の機会がより少ないことを考えれば、女性は男性よりもずっと社会的な達人」で、「男性よりも熱心な社会関係資本家だ」としている。（Putnam 2000＝2006：108-9）
- ② 同書では、“social capital”を「社会資本」と訳している。
- ③ 各人に協力するか裏切るかの選択肢がある場合に、個人にとっては裏切ったほうが得をするが、全員が裏切ると全員にとって不利な結果が生まれる。逆に全員が自分にとっては多少不利な協力をすれば、全員が裏切る場合より全員にとって望ましい結果になる。このような状況が「集合行為のジレンマ」である。（東一洋 2003）
- ④ 稲葉は、ソーシャル・キャピタルにおける外部性は、人が心の中で認識する能力に負うものであるとし、人々の心に働きかけて、人々が認識して初めて意味を持つ「心の外部性」とであると説明している。つまり、ソーシャル・キャピタルは、人が心で認識することによって初めてその機能と力量を発揮することができるのであって、施設や設備などのハードウェアや、法令や規則などのソフトウェアが整備されてできるものではないということである。（稲葉陽二 2011：28）
- ⑤ 「長野県は、『健康長寿』の県として近年脚光を浴びているが、保健補導員組織は、その『健康長寿』の要因の一つとされてきた、住民レベルの“遠慮がちな”地域ネットワーク組織であり、毎年、県内各地で約13,000人の住民が担い手となっているものである。」（今村ほか2010：9）
- ⑥ 「1990年にロンドン大学に設立された学習利益研究センター（WBL）は、社会的結束、主体的

市民参加、活動的加齢、公衆衛生の4領域に、成人学習が貢献しうる様相について、一連の主要な研究を実施してきた (Schuller et al. 2004)。(Field 2005=2011:134)

- ⑦ 筆者は、東日本大震災がきっかけで取り組まれた三つの社会教育活動について、各団体のパンフレット及びホームページ等による資料調査を行ったほか、現地で下記のとおりインタビュー調査を行った。

- ・「株式会社小泉地区の明日を考える会」の社会教育活動について

日時：2014年11月19日(木) 午後7時～8時

場所：「小泉地区の明日を考える会」事務所(宮城県気仙沼市)

対象：事務局長 加納 保

- ・「NPO 法人亙理いちごっこ」の社会教育活動について

日時：2014年11月20日(金) 午後1時～2時30分

場所：コミュニティ・カフェ・レストラン亙理いちごっこ(宮城県亙理郡亙理町)

対象：代表理事 馬場 照子、「亙理いちごっこ手芸サークル」(被災者グループ：筆者)

会員5人

- ・「特定非営利法人 和ーなごみー」の社会教育活動について

日時：2014年12月18日(木) 午後2時～3時30分

場所：「キッチン Nagomi」京都市下京区

対象：スタッフ 皆川 山起

- ⑧ 宮城県気仙沼市小泉地区は、2011年3月11日の東日本大震災の地震と津波によって壊滅。しかし、被災直後に住民が高台への集団移転を目指して「小泉地区の明日を考える会」を結成(2012年12月に株式会社に再編)。専門家の協力を得て24回のワークショップと6回のフォーラムを実施し、まちづくりの主体形成、集団移転の合意形成を獲得。その後国庫補助の認可を受け集団移転に成功した。(株式会社小泉地区の明日を考える会 2013)

- ⑨ メジローは、意識変容の学習を次のように定義している。「学習は、未来への行動につなげるために、以前の解釈を利用しながら、自分の経験の意味についての新しい、あるいは修正した解釈を分析するプロセスとして理解される (Mezirow 1996:162)」(立田ほか 2011:23)

- ⑩ 和田敦(わだあつし)：北海道南西沖地震で被災した奥尻島の復興のノウハウを持つ株式会社アトリエバンク常務取締役(株式会社小泉地区の明日を考える会 2013)

- ⑪ 森傑(もりすぐる)：北海道大学大学院工学研究院・教授。奥尻島の集団移転の調査データ『奥尻シート』をインターネットに公開。「考える会」の要請で小泉地区の集団移転プランをサポート(株式会社小泉地区の明日を考える会 2013)

参考文献

- 東一洋, 2003, 『なぜ今ソーシャル・キャピタルなのか——前篇～その研究の変遷と今日的意義～』日本総研ホームページ 経営コラムレポート (2015年6月16日取得、<http://WWW.jri.co.jp/page.jsp?id=13517>.)
- 馬場照子, 2012, 『亙理いちごっこ——ボランティアや被災者の方が集まって交流することができる宮城県亙理町のカフェレストラン』(パンフレット) 亙理いちごっこ.
- Field John, 2005, *Social Capital and Lifelong Learning*: The Polycy Press. (=2011、矢野裕俊訳『ソーシャルキャピタルと生涯学習』東信堂.)
- Florida, Richard L, 2002, *The Rise of the Creative Class: and How It's Transforming Work, Leisure, Community and Everyday Life*: Basic Books. (=2008、井口典夫訳『クリエイティブ

- 資本論——新たな経済階級の台頭」ダイヤモンド社.)
- 今村晴彦、園田紫乃、金子郁容, 2010, 『コミュニティのちから——“遠慮がちな” ソーシャル・キャピタルの発見』慶應義塾大学出版.
- 稲葉陽二 著, 2011, 『ソーシャル・キャピタル入門——孤立から絆へ』中央公論新社
- 株式会社小泉地区の明日を考える会, 2013, 『3・11からの挑戦・大好きな小泉を子どもたちへ継ぐために——集団移転は未来への贈り物』みんなのことは舎.
- Kawachi, Ichiro, Soshi Takao, and S. V. Subramanian eds, 2013, *Global Perspectives on Social Capital and Health*: Springer. (=2013、高尾総司・近藤尚己・白井ころ・近藤克則訳『ソーシャル・キャピタルと健康政策』日本評論社.)
- 松田武雄 編著, 2012, 『社会教育・生涯学習の再編とソーシャル・キャピタル』大学教育出版.
- Mezirow, J, 1996. *Contemporary paradigms of Learning: Adult Education Quarterly*: Columbia University.
- 三隅一人, 2013, 『社会関係資本——理論統合の挑戦』ミネルヴァ書房
- Putnam, Robert, David, 1993, *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*: Princeton University Press. (=2001、河田潤一訳『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』NTT出版.)
- , 2000, *Bowling Alone: the Collapse and Revival of American Community*: Simon & Schuster. (=2006、柴内康文訳『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.)
- 佐藤智子, 2011, 『社会関係資本に対する成人学習機会の効果——教育は社会的ネットワークを促進するか?』『日本社会教育学会紀要2011年度No.47』日本社会教育学会.
- Strawn, Clare L, 2003, *The Influences of Social Capital on Lifelong Learning Among Adults Who Did Not Finish High School*: National Center for the Study of Adult Learning and Literacy.
- 立田慶裕・井上豊久・岩崎久美子・金藤ふゆ子・佐藤智子・荻野亮吾, 2011, 『生涯学習の理論——新たなパースペクティブ』福村出版.